

主題 「普通」の小学校の英語活動充実の取組

学校の組織を生かした取組を基盤に、コミュニケーションを楽しむ児童の育成

吉井町立入野小学校

1 取組の背景

小学校教育からの英語教育の必要性は、従来から上がり、中教審の中間答申にも高学年での週1時間程度の必修化の動きも出ている。本校でも保護者の関心は高い。

昨年度まで各学年10時間程度実施してきた。英語圏のALT（中学校配置のALTを週1日程度派遣）との学習は児童にとっては楽しい時間の一つになっている。ALTとの距離感がなく、簡単なあいさつ程度は気軽に交わすことが見られ、ふれ合う事への抵抗感も比較的うすい。しかし、

1 英語活動の時間もプログラムもALTに任せきり

2 児童は楽しんでいるが、それはゲームそのものを楽しんでいることが多い

3 学年の発達段階を踏まえ、系統的にコミュニケーション能力をつける指導が不十分というような課題が年度末評価において毎年繰り返し職員から出され、学校の課題の一つである。

しかし、校内研修は、15年度からは『もっと知りたい・やってみたい意欲的に学ぶ児童の育成』に取り組み、19年度は理科の学習に焦点を当て、科学的思考力を育てる表現活動を中心に授業改善を図っている。したがって、英語活動の研修に組織的に取り組む時間には限りがある。また、新たに取り組むという印象（多忙感につながる）を職員に与えないことは現状の中での必要条件の一つである。そこで、この課題解決のために、本校での今までの取組を基盤にし、日常の各教育活動の延長として組織をうまく活用する中で、年度やALT、担当が変わっても継続し、気軽に取り組める英語活動の改善・推進を図りたいと考えた。

専門教科が英語である人的素材が配置されているメリットを最大限活用し「英語活動充実を図るために費やす時間の少なさ」を埋めていく。国際理解教育主任は、学校教育課題解決の核として「英語活動」の全体的な推進に当たる。それを受け、個々の職員は職の一つとして受け止め、従来取り組んできたことを「英語」をキーワードにし活動内容を工夫する。各分掌主任は、「英語活動」と結びつける視点で活動内容を構成する。放送委員会担当は英語にふれる放送内容の計画・工夫や放送委員会児童への指導。学級担任はclassroom englishを使う機会を増やし、教室の中で英語に気軽にふれる役割を担い、児童の実態をつかみ、カリキュラム改善と児童への支援の役割を担う。それぞれが、自分の職責の1つとして本来の職務の延長線上に明確に内容を位置づけることで英語活動推進の体制を作っていく。それは、校内組織としての学校経営参画意識を高めることになる。

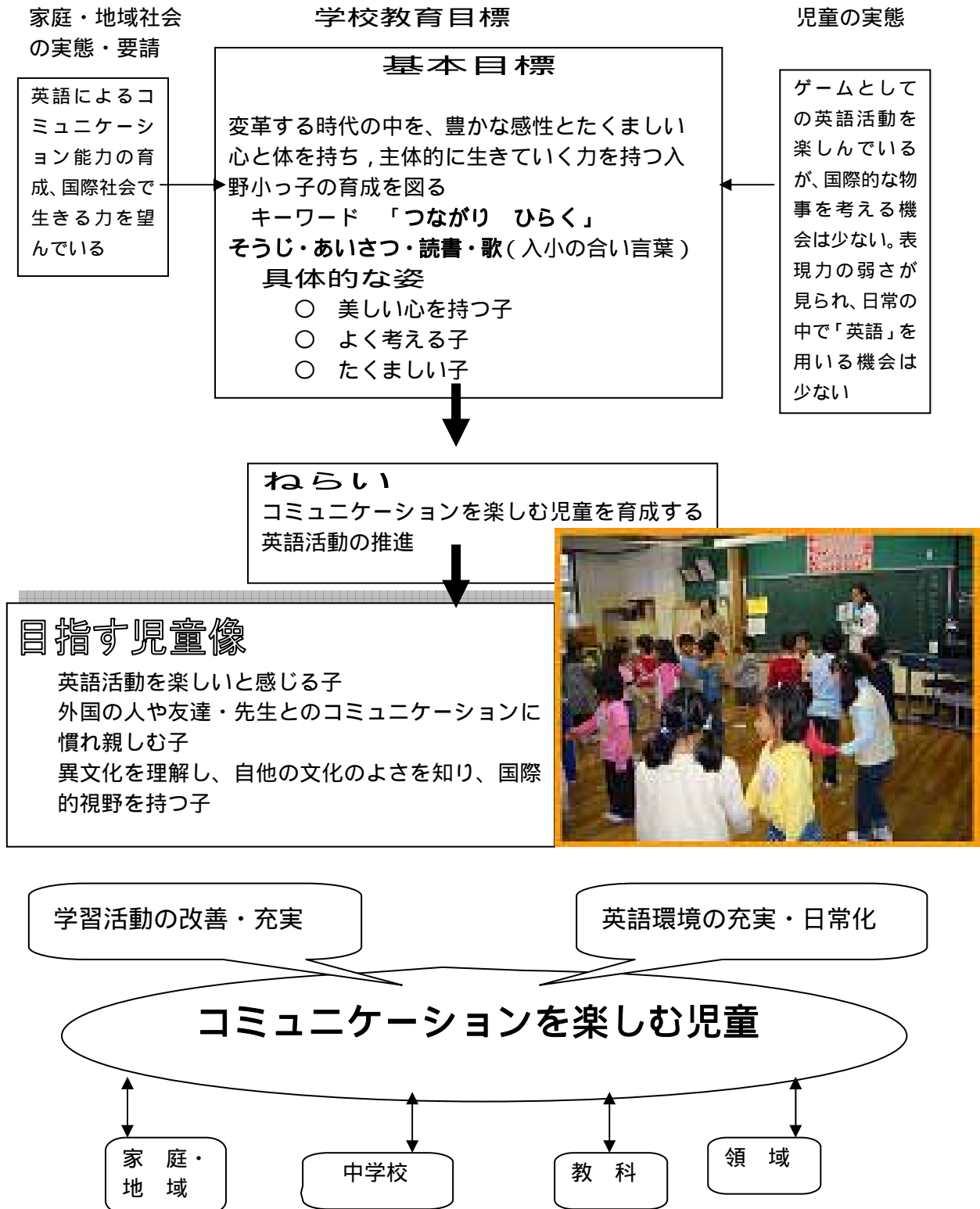
本校で考える英語活動のねらいであるコミュニケーション能力は正確に伝えることを目的の第一にするのではない。相手に伝えよう、なんとなく分かる、理解しようという態度を培うことを大事にすることである。そのことは本校の目指す『もっと知りたい、やってみたい意欲的に学ぶ児童の育成』につながる試みである。活動推進のために必要な物的面の整備については、ぐんま国際教育財団の助成金をいただけたことでその解消の土台も出来た。

指定を受けるのでもなく、校内研修としての組織的な取組のとりこしい体制と限られた時間の中で、『普通の小学校』の英語活動の充実を図る1つの試みである。



2 入野小学校英語活動推進計画

(1) 英語活動の全体構想図



(2) 本校における英語活動の位置づけ

目的と意義

国際社会に通用する日本人として、自国の文化に誇りをもつとともに、異文化に対する尊敬の念をもつことは、今後さらに求められる資質である。本校では、その観点に立ち、次の3つの視点で実践を推進する。

- ・ 英語を使ったコミュニケーションの楽しさを体験させる。
- ・ コミュニケーション能力を身に付ける言語材料の一つとして英語活動の系統的な指導の充実を図る。
- ・ 国際感覚を身に付け、異文化にふれる体験を充実させる。

これを踏まえ、以下の5つの視点から教育課程を再構築し、英語を媒体とした学習の在り方を研究していく。

- ・ 公立小学校における英語活動の在り方（目的と位置付け）
- ・ 英語コミュニケーション能力の向上のための教育課程の編成（指導内容）
- ・ 英語活動の具体的展開（授業づくり）
- ・ 自文化と異文化の両方のよさがわかる活動の工夫（国際理解教育からの工夫）
- ・ 英語に対する興味・関心の高揚（意欲化へ・日常化の取組）

各学年のねらい

1年	<ul style="list-style-type: none">・ A L Tや担任の先生の後について、英語の単語を言ったり、簡単なあいさつをしたり、英語を使った活動に参加できる。・ 日本とは違う国があり、違う生活をしていることを知る。
2年	<ul style="list-style-type: none">・ A L Tや担任の先生の後について英語の単語を言ったり、時間に応じたあいさつをしたり、英語を使った活動に参加できる。・ 日本とは違う国があり、日本とは違う言葉や文化があることを知る。
3年	<ul style="list-style-type: none">・ A L Tや担任の先生の後について簡単な英文を言ったり、英語であいさつしたり、英語の指示に応じて英語を使った活動に参加できる。・ 日本の生活や文化について興味を持ち、外国の文化に親しもうとする。
4年	<ul style="list-style-type: none">・ A L Tや担任の先生の後について簡単な英文を言ったり、その場に応じたあいさつをしたり、英語の指示に応じて英語を使った活動ができる。・ 日本の生活や文化について理解し、日本との違いを確認しながら外国の文化に親しもうとする。
5年	<ul style="list-style-type: none">・ 簡単な英文を言ったり、相手に英語で質問したり、英語の指示に応じて英語を使った活動ができる。・ 世界の人々の生活や異なる文化に興味を持ち、それを尊重しようとする気持ちを育てる。
6年	<ul style="list-style-type: none">・ 自分のことを簡単な英語で言ったり、相手に聴いたり出来、英語を使った活動を楽しむことができる。・ 世界の人々の生活や異なる文化を理解し、それを尊重しようとする気持ちを育てる。

3 研究の内容

(1) 英語活動の基本的な考え

言葉を学びたいという欲求は人間の本能に近い。が、言葉を学ぶのは楽しいという気持ちが基本的に必要。楽しいという気持ちを引き出すためには、子どもが言葉を習

得する流れを踏まえることが大切である。それが小学校における『英語活動』を構築する上での基本的な考えである。

小学校の英語活動ではまず、『聞く』ことをはじめとする。英語を聞く学習には『音を聴く』『音から意味を取り出す』の二種類がある。

低学年には「音を聴く」学習が向いている。高学年には意味を求める気持ちが強くなるので、そういう発達段階を考慮した取組が必要である。

そして、大切なことは日本語に置き換えた時に退屈になる授業をしないことである。同級生に What's your name? とたずねても面白くない。英語の技術を教えることは出来ても、コミュニケーション能力を育てることは出来ない。

英語をコミュニケーションの道具としてとらえさせ、こうすれば通じたという体験を積むことが大事である。その経験を積み重ねることで英語を使ってのコミュニケーションの楽しさを教えることにつながるとともに、子供の社会性を引き出すきっかけにもなる。中学校の『教科としての英語』とのつながりを目指すものではないが、教科目標の『積極的・主体的なコミュニケーション力』は中学校3年では身に付きにくいと思われる。そこで、小学校段階での系統的な英語活動により、コミュニケーション力のつながりを図りたい。「参考引用；小泉清裕氏（昭和女子大学付属小学校）・吉田研作氏（上智大学教授）」

(2) コミュニケーションを楽しむ児童とは

相手に関心を持ち、簡単な英語表現を用い、何とか言おうとする児童

相手を理解しようとしたり、身振りや手振りを交えて、会話しようとする児童

反 説

- 1 ショート劇などのごっこ体験・ゲーム・リズムを取り入れた活動を展開することによって、英語活動を楽しみ『英語をつかう』楽しさを体感することが出来るであろう。
- 2 英語活動に関する環境を整備・充実し、日常生活の中で英語にふれる機会を作れば、英語に対する親しみを持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童に育成できるであろう。

(3) 学習活動の改善・充実

英語を使った活動を体験させ、その体験を通して国際理解を図ることを目的とする。中学校英語に結びついた英語の定着を狙うものではない。授業は、英語を使い楽しくコミュニケーション活動を中心とする。その中で、外国の文化を知ったり、日本との違いやよさに気付かせたりする。

たくさんの英語を正しく話せることが目的ではない。『分からない』とあきらめずに、相手の言うことを分かろうとし、自分の言いたいことを工夫して伝えようとすることを大切にする。

子どもも教師もともに楽しむ活動とする。

(4) 内容

題材は1時間1トピックで進める。発達段階に応じ、学年によって扱う単語の数・文を変える。

1時間の構想

「意欲を高める場」「思いを膨らませる場」「やってみる場」を視点に授業計画を作成する。

あいさつ warm up (歌や復習) 練習 ゲームなど まとめ (歌) あいさつ

英語活動の教育活動として18時間を計画。次の観点から計画を立てる。

全ての学年の英語学習指導計画を立てる。(19年度は2学年ブロックで単元構成)

児童の発達段階を考え、内容を改善し漸次発展的な展開を工夫していく。
 A L T (Assistant Language Teacher) を十分活用し、「きいてみたい・いってみたい」英語活動を実践する。
 H R T (Homeroom Teacher) と A L T との連携ある授業づくりを行う。
 J E T (Japanese English Teacher 日本人英語教師) を活用し、児童の英語への抵抗を軽減する手立てを行う。
 Listening , Speaking を中心に発達段階を考慮して取り入れ、コミュニケーション能力の基礎を築いていく。
 ゲーム、チャンツをはじめ、動作化の導入により、英語への関心を高めていく。

(5) 指導に当たっての配慮事項

全員が参加できるよう、活動や体験を多く取り入れる。
 どの子も 1 回は発表できる場を作る。
 苦手意識のある子はしっかり褒める。
 英語の雰囲気浸らせるために簡単な指示や褒め言葉は英語で伝える。
 繰り返しの指導で自然に英語に親しませる。無理に覚えさせることはしない。
 音楽を通して英語の音とリズムに慣れさせる。
 視聴覚教材や教具の有効な活用により、学習の『楽しさ』を高める。
 文字の指導は原則として行わないが、出来るだけ目にふれる機会を作る。

(教室や校舎内の環境づくり)

(6) 国際理解教育主任・学級担任と A L T ・ J E T のかわり

国際理解教育主任	コーディネーターとして、年間の構想を立てる。特に、学年の発達段階に応じた 1 時間のプログラム作成を中心とする。環境づくりを工夫し、関係者に協力要請をする。
学級担任 (H R T)	A L T との授業展開や役割分担。対話の確認など 1 週間前の放課後に打ち合わせを実施。原案を基にし、指導案に加除修正をする。授業の進行・児童のモデル・A L T の指示の繰り返しや強調。本時の内容のポイントの強調・一人一人の児童への支援・場面に応じてタイムリーな賞賛・支持 (クラスルームイングリッシュ) 活動中は学習者の代表として児童と一緒に活動する。 ゲームなどの活動が楽しくスムーズに行えるように学級作りをする。
A L T	国際理解教育主任作成プログラムの相談に当たる。教材や教具の準備。H R T と協力して授業の進行・ネイティブな英語をより聞かせる。英語を使って児童とコミュニケーションし、英語や文化、生活について伝える。
J E T	国際理解教育主任・学級担任と協力し、活動の計画や活動内容についてアドバイスする。 教材・教具などのアドバイスをする。 教室環境など掲示物作成。 英語の発音、話し方、態度のモデルとなる。

打ち合わせの時間の設定 (毎週水曜日の放課後 : 週予定表に) 短時間でも打ち合わせを心がける。

(7) 英語環境の充実・日常化

国際理解教育として、自文化をみつめる機会をつくり、異文化を理解する資質を養う。

「英語」を口に出す・目にする・耳にする場を意図的に設定する。

English Board を設置し、英語に触れ合う機会の日常化を図る。

Having a good Time with ALT を設け、ALT のいる水曜日は、ALT とコミュニケーションをとることのできる時間と場を設定する。

English Festa (英語の日) を設定し、英語を身近に感じる場をつくる。

水曜日は English day として、放送委員による簡単な英語での放送や英語ビデオ放送・英語の絵本をビデオで流す。

(8) 推進の具体的な実施のスケジュール

年間を通して1学年18時間×6学年＝全108時間の英語活動の時間の確保・充実(毎週水曜日)

1～6年...年間を通じて、「ALTといっしょに英語で話そう」を実施する。

(国際理解にねらいをおいた英語活動の充実、社会科における外国学習の充実、国語科において、自分や自分たちの様子、日本のことを発信する授業・活動の拡張を図る。)

国際理解教室の実施。

海外で活躍した方(講師;青年海外協力隊やその他外国で活動をした人)を招聘し、言葉の違いを核とした文化の違いを知る。同時に言葉の違いを超えて『人間』としての理解を図る場とする。

12月にEnglish Festa(英語の日)を実施。

親子国際理解バスの実施・修学旅行でのインタビュー。

- ・JICA を訪れ、青年海外協力隊経験者の話を聞き、『言葉』の違いの不思議さと大切さに触れる。
- ・修学旅行の活動の中にコミュニケーション活動の実践(鎌倉で外国人旅行者へのインタビュー)

英語活動授業プランの見直し

- ・単元配列表・単位時間指導案(展開案)・教材・環境整備
- 職員研修
- ・職員研修として、一般研修計画に位置づけ英語活動について全員で研修する。(夏季休業中)
- ・先進校視察研修、本校の授業力向上の1つとしての1人3授業公開として「英語活動」の授業実施。

4 実践の概要

(1) 年間18時間の英語活動(総合的な学習の時間;1・2年生いりのタイムで実施)



基本的には担任とALTでのTT

指導活動例

活動指導案1トピックについて2学年で学習することとした。まず、なれることが大切であると考え、同じ内容について、学習することで『理解』を深める。基本的には同じフレーズを使うが、単語を増やすことや対話形式の内容を変えることで、少しずつ積み重ねられるように構成した。

1年生 果物の名前 フルーツバスケットの要領で(担任とALT・JETの複数授業)なんのてらいも感じない1年生という学年の特性を生かし、ゲームの中で自然に『言葉』として受け止めさせる。間違いや失敗の意識がうすいため、英語活動の進め方の基礎をこの段階で培う必要がある。

学習活動の例 英語活動指導案 < 10月 >

4年

- 1 題材名 ~ 動作・方向 ~
- 2 ねらい 学校の中の場所を表す英語と場所を聞く表現を練習させる。
- 3 準備 担任：CDプレーヤー ALT：CD、絵カード
- 4 展開

学 習 活 動	ALT	HRT (JTE)
<p>greeting 英語で挨拶する。 (学年の実態に応じて取り入れるあいさつを変える) review (family) 前時の復習をする。 家族のことは English song 「 Jelly in a Bowl 」 を歌う。 歌の本 16 学校の中の場所を表す 言い方を練習する。 playground, swimming pool , gym, library classroom wash room music room, staff room Here There 文型練習 Where is <u>the library</u> <u>y</u> ? Here / There activity ラッキーパーソンゲーム 男子と女子で2重の円を作る。 女子が目をつむっている間に男子 のラッキーパーソンを指名する。女 子が男子5人に話しかける。最後に ラッキーパーソンを発表。ラッキー パーソンと話した児童が勝ち。男女 交代です。 本時の学習を振り返る。 今日言えるようになった 英語を発表する。</p>	<p>"Good morning[afternoon} How are you? practice of words sing together  practice the words practice explain the game Use this dialogue Hello Where is <u>the library</u> ? Here ,There, over there </p>	<p>"Good morning[afternoon], I'm fine ,thank you. 担任が絵カードを提示する カタカナとの発音の違いに 気をつけさせたい。 チャンツなので、音とリズム 感を大切にする。 難しい単語の練習を繰り返 し、教える。 日本語のこそあど言葉と対 比させて、Here Thereの 意味を教える。 正しい英語になれるため、 冠詞の説明はしないで、その まま後について練習させる。 ゲームを進行する。 冠詞は使わなくてもよい。 場所の名前を確認する。</p>

実践の様子と課題

前時の復習や歌などリラックスすることを大事にし、学習展開することで子供たちは、ゲームを楽しみつつ、分かるようになる意欲が高まってきている。ピクチャーカードを見ながら『単語』を意識し、なんとなくこうかなという発言も増えている。

本時の内容は3年・4年で扱うトピックである。今年度は18時間ごとに内容を構成し、2学年で段階を追って学習するよう計画している。実践してみると、子供なりに使ってみようという意欲は喚起できるが、1時間1トピックのため、歌や言葉や言い回しなど『英語活動での定着』に課題が残る。この課題解決のための方策は次のように考える。

- ・同じトピックで2時間繰り返して活動する単元構成。
- ・学習した言葉や言い回しを普段の生活の中で、担任が意識して使ったり、学習した言い回しを使って指示を出したりなど、『英語』の言葉に触れる機会を持つこと。
- ・1時間の学習の中で練習のバリエーションを考え、繰り返す時間を増やすことが必要。

英語環境の日常化

ア 水曜日は英語の日

- ・放送委員は簡単な英語を使って放送でメッセージを伝える。
- ・職員の打ち合わせも出来る範囲で英語を交えて行う。日直は英語で打ち合わせの司会を進める。(国際理解教育担当者がモデルを配布)
- ・給食時の英語に関するビデオ放送(清掃時の放送とリンクさせて、視覚と聴覚に訴える)
- ・朝、帰りの会、廊下でも簡単なあいさつを英語で交わす。

イ 清掃時の音楽；英語の歌

気に入ったフレーズを口ずさみながら清掃をする様子が増えてきた。繰り返し耳に入ってくるリズムとしての効果は小学生には有効である。一歩進めて、学習の中に同じ歌を導入として流すことで、自然に学習の雰囲気になじめるようになってきた。

ウ 掲示の工夫

教室表示や階段に『英語』でカードを掲示。何気なく目に触れ、無意識の意識化につなげる。

エ 修学旅行でのインタビュー

6年生の修学旅行時に鎌倉での外国人旅行者へのインタビューを活動の中に位置づけた。『コミュニケーション』を実践する絶好の機会ととらえた。ヒントカードを持っての取組であったので、緊張の中にも会話が出来たという『喜び』を体験できた。20人の



外国の方と簡単な会話の出来た児童もいる。やってみようということがコミュニケーションの始まりである。

家庭の理解「親子国際理解バス旅行」

国際理解教育の一環として8月21日にJICAへ出かけた。青年海外協力隊経験者からの話や中東の紹介コーナー、アジアカフェなどを体験した。英語圏以外の様々な言葉のやりとりや文化や生活の違いの一端を知ることが出来た。

Today is Wednesday.
good morning
everyone. You meet a
teacher and friends,
let's greet with loud
voice.



「保護者の感想から」

『親子で共通の体験をすることで家族の会話が広がる。今は理解できないことも、何か感じることがあって、いつかそれが理解の幅を広げるチャンスになることがある。』



『限られた時間の中では言葉が分からなくても、ゼスチャーやその場の雰囲気で見ることがある。しかし、その国で生きていくためには、言葉を理解しなければ、命にかかわってくることもある。単なる『言葉』ではないことが少し分かった。』『大上段に言葉とは文化とはという理解するのは大変である。が、今回の経験は、楽しみながら体験でき、子供たちにとってもよい経験になったと思う。』という感想が寄せられた。

子供たちは、未知の世界があることをおぼろげながら知る機会であった。『食物』や『衣服』などクイズ形式の展示を楽しむ中で、『文化』の違いを少し体感できた。日常生活の中で、機会の少ない本校児童にとって、『世界』を意識的に広げ、言葉の違いを乗り越え、コミュニケーション能力の育成の必要性を感じる機会となった。

English Festa の実践

12月に設定。計画案は国際理解担当者が中心となる。

- ・ストーリーをよく知っている昔話のALTによる英語版の読み語り。（朝活動での読み語り活動としての位置づけ・絵本をプロジェクターで投影する）
- ・児童集会の活動で『英語』に親しむゲームを集会活動で実施。音楽集会では英語の歌を取り入れる。楽しさを体感すると同時に、英語活動への意欲を高める。

細案については、各担当が中心となり指導し実践に当たることで、『英語活動』を全職員が職の一環として無理なく実施できるようにする。また、この実践によって、各教師の意識を強化することをねらう。

(2) 職員の意識の変容・高揚のために

夏季休業中に講師招聘による研修の実施

教材の持つ特性やゲームの効果的な導入のあり方を自分が体験するワークショップ形式で実施。理念については今までにも研修する機会は各自が経験している。しかし、概念としては分かるが、実際のイメージとしてつかむ場や積極的な姿勢に欠けていることも現実である。したがって、まず、体験することで、教師の意欲を喚起することが第1歩である。

JETの計画的な活用

本校主任へのプログラムに対するアドバイスを主にJETを研究補助者として協力要請。ALTとの打ち合わせはもちろんであるが、小学校英語活動の経験を生かし、実際の授業にTTとして参加。児童の実態を把握し、プログラムの有効性を検証する。また、担任の役割のモデル化により、担任の英語活動への負担感の軽減。教師も児童以上に経験を積み重ねることによって、英語活動の授業への慣れが必要である。

モデル授業の実践

ALTとJETによるモデル授業を実践。担任の『英語活動』の授業の理解を深めると同時に、モデル授業を参観することによって、担任としての苦手意識の払拭とより学習活動に関わり、児童の実態に応じた担任としての支援への体制作りを意図した。

5 まとめ

研究指定校でもなく、校内研修としての位置づけのない中でも、現体制の中で「英語」という要素を入れて、学校の諸活動を見直すことをキーワードにし、「意識を変える」「時間を作る」ことで改善が図られた。2011年度予想される「英語活動」の本格導入にあたって無理なく有効に進める1つの指針を得ることが出来た。

(1) 成果

児童の視点で

- ・清掃時の15分間、放送で英語の歌が流れている。毎日繰り返して聞き流しているうちに、フレーズを口ずさむ光景が増えている。意味の理解ではないが、心地よいフレーズとなり、日常の中に位置づいている。気軽に口に出せる雰囲気は『ねらい』達成のための基盤のひとつである。なにげなさが要素である。
- ・廊下で交わすあいさつ、lunch time や英語活動の依頼などALTとの会話に英語で語りかけるなど場が増えてきた。機会を作ってやるのが大切である。
- ・修学旅行での英語での簡単なインタビューは6年児童にとっては『自信』につながった。コミュニケーションの始まりは、雰囲気・使ってみよう・いってみようという環境であり、機会を作ることである。

教師の視点で

- ・前の週にプログラムをもとにALTと打ち合わせをすることにより、授業への「担任」としての関わりを意識し、授業を進めるようになっていく。日常の延長線上で、コミュニケーションとして挨拶や指示を英語でする気軽さを教師自身が表現しようとしてきた。水曜日の職員打ち合わせの司会は英語で行い、提案者も出来る範囲で英語でと心がける教員が増えている。担任が、簡単な言葉やあいさつ、言い回しなど、英語活動の学習時以外でも日常の中で使っている学級は、『英語活動』の時間を子ども自身がより楽しんでいることがうかがえる。ALTも学習を進めやすいと実感している。
- ・身構えて『英語活動』を進めるというのではなく、それぞれの持ち場でちょっとがんばってみれば前進できる体制と意識が、本校の『英語活動』の推進を支えている。
- ・国際理解教育担当者は自分の職責として視点を深めて取組み、職の成長につながっている。個々の職員の意識を校務分掌の取組として位置づけを図り、活動の内容の充実につなげることで、特別なことをしているという負担感や多忙感はずいぶん減った。
- ・放送委員会児童の『英語』を使った放送や『英語活動』と結びつけた児童集会活動などに見られるように、児童の諸活動の内容の充実が図られている。

(2) 課題

評価規準の作成（指導と評価の一体化）

教科としての個人評価を与えるのではないが、指導の充実のためには、ねらいの達成度を教師が絶えず見取っていかなければならない。1時間が終わることが目的ではない。評価規準に照らし合わせ、指導の改善・充実に努め、英語活動としてのねらいを達成する。

質と量の充実

積み重ねと適切な機会を与えることで、コミュニケーションの楽しさと自信を体感させたい。総合的な学習の時間の中で『35時間』の英語活動を位置づけ、カリキュラムの改善・充実に図り、学び・経験の継続性を高めたい。

計画的な研修の実施（担任の取組への意識化の強化）

教師がまず積極的に英語を媒体としてコミュニケーションをとる姿勢が求められる。学習内容への担任の関わりなど、以前に比べると深まりが出てきた。しかし、簡単な指示も『日本語』でするなど抵抗感が見られる教師もいる。授業力改善の観点で英語活動のモデル授業や校内公開授業など意図的な位置づけを図り、職員の意識を高め、職員相互が学びあい、実践に結び付けていく。

日常化

『英語』でのコミュニケーションを深めるためには、日常の中に『英語』が無意識に目や耳に、そして口に出ることが基礎となる。また、表現することに自信を持てるよう、学校教育活動の中にそういう土壌をさらに作っていききたい。